



—感じる美術—

広尾学園高等学校

仲 千尋

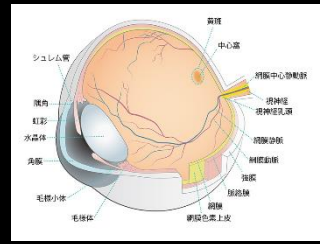
青野 純怜

菅野 遥日

この研究で視覚が正常な人も
そうでない人も中間の人も誰もが
楽しめる視覚に関してバリアフリーな
美術作品の作成を目指す。



これらのいずれかが
故障するだけで
目の病気になる。
他の病気の**副作用**が
目に及ぶ可能性もある。



目の病気,
日本眼科学会より引用

障害程度等級表

級別	障害程度
1級	両眼の視力が0.02以下かつ他方の眼の視力が0.02以下のもの
2級	両眼の視力が0.02以下かつ他方の眼の視力が0.02以下のもの
3級	両眼の視力が0.02以下かつ他方の眼の視力が0.02以下のもの
4級	両眼の視力が0.02以下かつ他方の眼の視力が0.02以下のもの
5級	両眼の視力が0.02以下かつ他方の眼の視力が0.02以下のもの
6級	視力の良い方の眼の視力が0.3以上0.6以下かつ他方の眼の視力が0.02以下のもの

障害程度等級表によると
6級「資料区の良い方の
眼が0.3以上0.6以下かつ
他方の眼の視力が
0.02以下のもの」

→健常者と視覚障害者の
境目はグラデーション

視覚程度等級表より引用

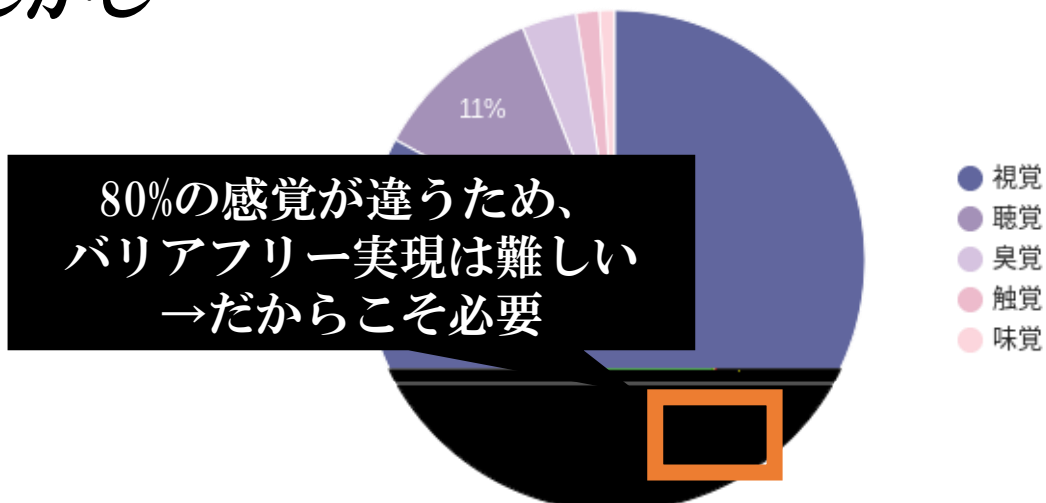
作品で感じることができる五感は

触覚

聴覚

しかし...

五感による知覚の割合



80%の感覚が違うため、
バリアフリー実現は難しい
→だからこそ必要

【研究背景】

いろんな人に自分の作品を見てほしい

【研究目的】

グローバル化する社会
芸術面でのエンタメの昇華
スポーツ面でのオリンピックを
アートでも広げたい

【社会的意義】

障害者と健常者との間の
差やコミュニケーションの
齟齬を芸術で埋める
実際に調べることにより、目
の見えない人の世界を少し知って、相手のことを考
えられるようになる。
新たな美術史の発見が
できるかもしれない

現在行われていること

東京都美術館「障害のある方のための特別鑑賞会」

…事前申込制、付添人以外の健常者NG

ワークショップ

…「健常者と視覚障害者の対話で感じる世界の違いを楽しむ」

…事前申込制

誰もがいつでも鑑賞できる「美術館」のような環境をつくりたい
健常者も障害者も同じように感じている世界を共有したい！

また、これまでの研究では…

作品形態	物	高さの基準	説明	作品理解
油絵(11点)	人物	明度	不足	失敗
棟方志功版画 (2点)	人物	二値化	十分	成功
マルク・シャガール 『アレコ』背景画	風景	明度	十分	失敗
藤朝山作 『嘔牛』彫刻	牛	彫刻	不足	成功

手で触れる「人物」「身近なもの」
はっきりと2種類にわかれる凹凸の作品
彫刻の作品がわかりやすい

ギャラリーTOM

人物

盲学校の生徒の方が過去に作られた優秀作品

たどると作品を触ることができる手すり

手のモチーフで平和を表現した作品

※撮影許可をいただきました。

実際に視覚障害者のための美術作品を展示をしている
ギャラリーTOMに行った。

実際の展示のほかに「触察本」というものが公開されており、目が見えなくても歴史的絵画を展示のように鑑賞できる本が製造されていた。

⇔ギャラリーTOM限定のものだった

【ギャラリーTOMに行ってわかったこと】
作品を粘土で作り、ブロンズ像にして触っても傷がつかないようにしている。
目が見えなくてもスムーズに作品が鑑賞できる設計になっている。
渋谷駅から徒歩15分で展示室は二部屋。

視覚のバリアフリーを前提とした「誰もが感覚を共有できる」
作品を作り、大きな美術館の展示まで発展させたい！

そこで作品を作って、三人の健常者に目隠しをして鑑賞してもらい、
以下の質問をした。



Qこの作品は何だと思えますか？
Qこの作品をどう感じましたか？
Q説明を聞いてどう思いましたか？

この作品は、「手」です。平面から突き出た指は壁を超えてる力を表現しました。

Qこれは実用できそうですか？



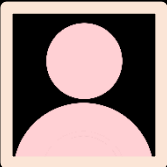
手だとわかった。平面から突き出ていることも感じた。
美術館全体はできないかもしれないけど、ワンコーナーならできそうだと思った。

T氏(女・16歳)



角があるなって思って指っぽかったので数えたら5本あったので手だとわかった。

Y氏(女・16歳)



すぐに手だと思った。素材もわかった。平面から出てることはわからなかったが、言われ納得した。人それぞれの感性なのでわからなくても面白いと思った。

A氏(女・15歳)

展示に肯定的な意見が多い→小規模な展示からの発展
今回の試験で制作側としてわかったこと

メリット

・工程が少ない→作りやすい ・実物と同じ形→正確に伝わる

デメリット

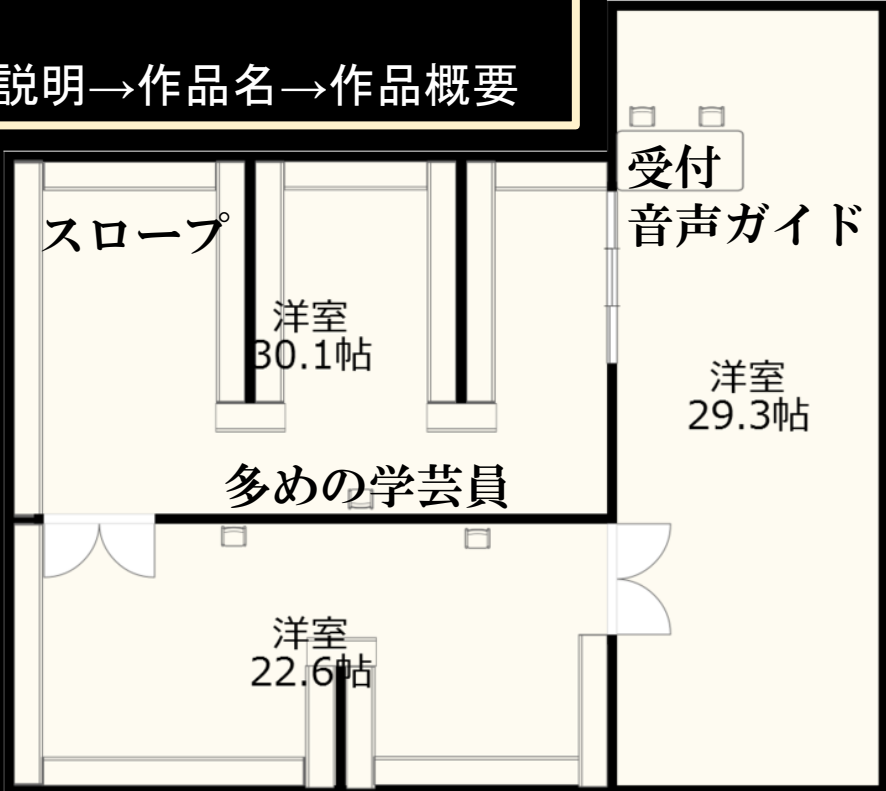
・触るともろくなる ・ブロンズが高い

→誰もがみれるようにと専用予算を組んでおく

実際に展示するとしたら

音声ガイド
道案内→作品の形状説明→作品名→作品概要

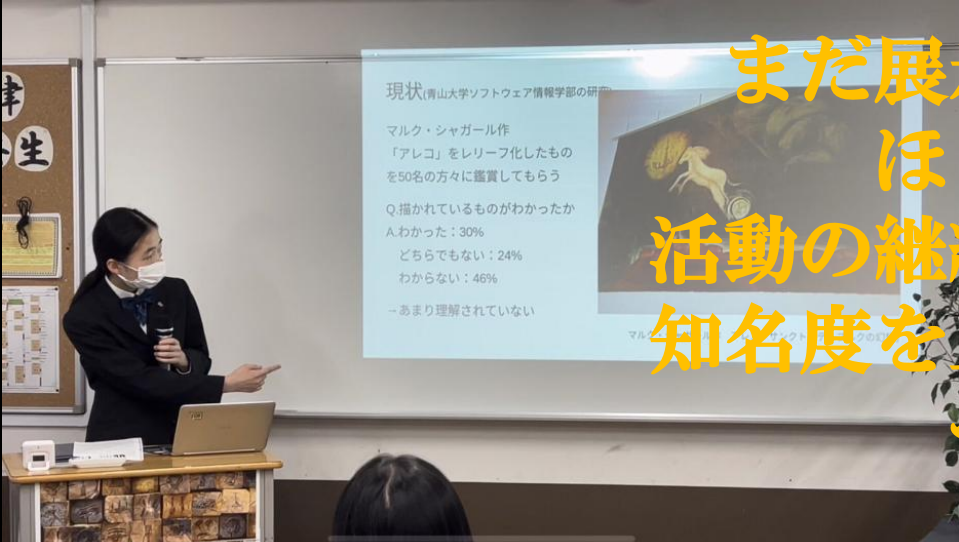
- ・スロープの数を増やして
- ・たくさんの作品が展示できるようにする
- ・床に筋などを引いて点字ブロックのようなものを展示室にいれる
- ・メジャーな美術館に
- ・触察本を置き、気軽に触れられるようにする



→この設営に、先ほどのような作品を飾れば「誰もが楽しめる美術館」も夢ではない！

大きな美術館での展示を目指すためには、我々が「目が見えない人のための美術」の知名度を上げるべき

実際に学校の文化祭で活動をプレゼンした



まだ展示の実現に
ほど遠いため
活動の継続とともに
知名度を上げていく
べきである